

となった……」と聞きました。我々は「負けたのか、本当のことらしい」と話し合ったりしましたし、通信兵からも「玉音放送があった」と聞きました。

大本營の発表と、現地での艦砲射撃を体験したのとは違っていたので、「そうだろう、我が軍の損害と連合軍の損害とは比較できない」「待ち続けていたトラック島からの救援も来ないし」「日本軍の飛行機は飛び上がって、降りて来るとメチャクチャになった」など、あれや、これやを思い合わせれば「負けたのか、本当のことらしい」が「本当だった」との実感が出てきました。後に分かったことですが、トラック島もやられたのだから救援に來ないのは当然でした。

呉町さんは、昭和四十七年に撮影された、サトウシ島の破壊された飛行機の残骸を見せられた。

私たちの部隊は、柏第一二五〇一部隊で、終戦の昭和二十年十一月八日に浦賀に到着、十一日に上陸復員しました。南方の方は食料もなく、栄養失調や疾病による患者も多く、将兵が疲労困憊していることを連合

軍もよく知っていたようで、駆逐艦「春月」を復員船として早く帰還させたと聞いています。前にも申しましたが、終戦が遅れたならば、我々は艦砲射撃や銃爆撃による犠牲ではなく、栄養失調から餓死したことでしよう。

仏印インラン高射砲陣地

討兵団野島隊の想い出

富山県 大野 博

私は大正十一年十一月二十七日、富山県、現福岡町の農家で生まれ、甲種合格、富山第三十五連隊留守隊へ入り、第二十一師団より迎えに來られました。連隊本部はタイのバンコックで、入隊後初年兵教育を受け、警備や作戦とビルマ国境付近まで勤務をしました。

現在のベトナム当時の仏領印度支那で、第二十一師団（討兵団）、歩兵第八十二連隊第二大隊本部で終戦を迎えました。「国の為なにか惜しまぬ我が命 笑顔

「でゆかむ靖国の御社」と、昭和二十年一月、ハノイの三浦隊兵舎で国のためと一途に思い明号作戦に向かう意気込みでした。しかしそれもむなしく、八月十五日終戦の詔勅とは…。

外地野戦にいた私たち日本軍人として割り切れないような悲惨な出来事でした。私は当時、仏領印度支那トンキン州（東京）ハノイ（河内）郊外四キロのインランという高射砲陣地にいました。

バナナ林で遮蔽された中に四門の高射砲が円形に陣取り、その中央に指令所を置き、空から見えない堅固な陣地でした。その砲に実弾を込めていつでも発射できる態勢で、第二十一師団司令部のあるハノイの上空を見守っていました。

陣地から三百メートルほど離れた竹藪の中に私たちの兵舎があり、上空や周囲から分かりにくい静かな環境のよい野原の中でした。またこの陣地は昭和二十年三月九日、仏印接收明号作戦において第三中隊が戦闘により占領した仏印軍の高射砲陣地でした。

昭和二十年五月、第二機関銃中隊から野島少尉（ハ

ノイ第二十一師団機関砲陣地兼務）を隊長として、以下四名、第七中隊より小野寺軍曹以下三名、計八名の第二大隊の兵隊がこの陣地の任務にっていました。

任務に付いた当時、陣地の入口周辺には戦死した仏軍兵士の死骸に土を被せた程度の粗末な墓地がありましたので、私たちが木で十字架を作り、その死骸の上に立て、彼らの祖国に対しての忠誠を尽くして命を捧げたことに対し冥福を祈ったのです。

この陣地には日本軍の捕虜となった仏印植民地兵が六十人ほどいましたが、私たちは終戦の日までこれらの捕虜と共に同じ兵舎で寝食や勤務などをしていました。仏印植民地兵を兵補と呼んでいて、和気あいあい、なごやかな毎日を仲良く暮らしを共にしていました。兵補とも片言の日本語が通じるようになり、我々警備任務の補助をしていたのです。

軍の規律が厳しい中にも、私たちと兵補たちとの間に、戦勝国・敗戦国という隔たりもなく、平等の気持ちで楽しい毎日を送っていたのですが、それもつかの間、敗戦色が濃厚となって、日本軍に不運な日が訪れ

ました。

南国の太陽が日の出とともに強烈となり、四〇度近い炎熱の日が続き、うんざりとして、南方ボケで頭が変になるような、八月十五日でした。昼食を済ませて皆で一服という時、本部より緊急電話があり、「重大な伝達事項のため野島隊長が来るから、兵補を除いて全隊員集まっておれ」とのことでした。

竹藪の中の小さな兵舎の前に整列すると、隊長より「二十年八月十五日正午、大東亜戦争終結との玉音放送があった」と伝達された。南方軍は無傷で善戦していると思込んでいたのに、この隊長の言葉を疑うほどでした。

「ここはお国の何百里、離れて遠き……」と歌にあります。それが、それより遠い南方の大陸まで勝ち進んで終戦とは。一人の隊員が隊長に向かい「終戦とは間違いでありません。我々日本軍は無傷で健在です」と言い切った。しかし、隊長の言葉は続き「南方、百万の日本軍はまだ健在だと私も信じたい。部隊命令、上官の命令であり服従せねばならぬ」ということでありま

した。

さらに「今後、兵補に終戦を悟られぬようにしながら、本隊の指示あるまで、この陣地を現状のまま守っておれ」とのことでしたが、日が経つにつれ、周辺の部隊にも日本軍の敗戦が知れ渡り、現地住民も騒ぎ出しました。

兵補の中にも一変して態度の変った者も始め、毎日、安心できない日が続いたのです。また、本隊からの通達によれば、「各方面に駐屯している小部隊が部落民や暴徒の襲撃を受け、兵器・弾薬を取られていくとのことであり、インラン高射砲陣地も警備につき特に嚴重にせよ」とのことです。そのうちに、我々の陣地も接収され、元の現地軍の陣地となり、兵補たちとも別れる日がきました。

我々日本軍は、これより別の所に勤務するので残務整理にとりかかりました。本部指示により食糧・被服などを兵補に与えて、各自、自分の出身地に帰させる。国籍や人種、言葉が違っても情をかけてやれば、真実の真心は皆人間として通ずるものであり、彼らとは別

れはつらいものでありました。彼らを見送りながら、また、いつの日か会うことができるようにと願ったものです。これより我々が敗戦国となり、我々の頭の中にはただ今後どうなることやら、故郷や家族を思うにつけ気持ちは一転してしまふ。負けたとなれば情けないもので、自分のことばかり考えていました。

インラン陣地も進駐して来た中国正規軍に接收され、この兵舎も用がなくなり、各自、元の中隊に復帰することになります。私も第二機関銃隊に戻り、中隊の皆と一緒に兵舎での生活ができるのが何より嬉しかったものです。

終戦となったので、陣地勤務のときのように不安も感ぜず、伸び伸びと生活できました。陣地での空襲に對する対空戦闘もない日々となったのが、因縁といふべきか、このシタデルにて武装解除されました。先日までの軍国主義の勇ましい時代も去ったが、日本軍としての規律（軍紀）を守り、部隊制度を保ち、軍としての統率力は欠けたといえども風紀は乱れず、帰国の日まで日本軍としての行動をとっていました。

日本人の人間性の優れていることを、昔の諺に「腐っても鯛」というが、このように勝っても負けても軍紀の厳正を保ち、兵補や現地人に対しても、人間として日本軍として接してきたことは、敗れても日本軍だ、日本人だとのプライドは持ち続けたと思っています。

これより復員の日まで、すべて連合軍の指示に従って行動し、銃を持つ手が「つるはし」に代わり、石炭掘りをする事となった。世界でも最良質の無煙炭を産出する露天掘りの炭鉱の町、モンゼオンに向かうことになったのです。

昭和二十年九月、ハノイにいた我々は、石炭運搬の無蓋貨車に乗りハイフォンに向かう。ハイフォンは北部仏印の第二の大都市であり、第一の港で軍港でもあります。終戦まで日本軍のいろいろの施設もあり、南方第四陸軍病院という軍の総合大病院もあつたのです。私も戦闘で負傷したとき、二カ月ほど入院してお世話になつた思い出の懐かしい町でもありました。しかし終戦と同時に連合軍の旗が翻り、我々は遠慮して通らねばならぬ町と変わってしまったりました。

これより石炭の積出し港ホンゲー町に行く。生産される石炭は「ホンゲー炭」といって、世界に通用しているこの無煙炭によって、北部仏印の経済が賄われ、日本にも輸出されているとのことである。ハイフォン、ホンゲー、カンフワ、カンフワポート、モンジョン、ハッー、これら沿線の町は石炭鉱脈の続く炭鉱の町々です。

これらの町には各隊が分散させられました。私たちは第二大隊の隊員も一番奥地のモンジョンの炭鉱町に着く。前は八海、後は山、その岩肌小さな平らな土地です。私たちが到着した当時、廃虚の寂しい町で、炭の施設も破壊されており、石炭掘りも名ばかりであったのです。モンジョンの町は、南支那との国境に近く、朝晩は日本の気候とよく似ており、肌寒くて冬の軍服を着ていました。

十一月三日、明治節（現在の文化の日）。部隊では故郷を想い郷土色豊かな演芸会が催されました。各隊では材料もない中で舞台や踊りの衣装に知恵を絞り、どれも望郷の思いに絡んだ演芸でした。無精ひげの兵

隊も、童顔の兵隊も皆故郷を思い懐かしんだものです。今ごろ、日本はどのようになっていることやら、また、家族や近所の人たち、皆元気でいるだろうか……、部隊全員が元気で助け合い、無事帰国できることを誓い合い、だれ言うともなく、遠い日本の空を仰いで「オーイ皆元気かなあー、俺らも元気でいるから待っててくれやあー」ただ涙が胸に押し上げて声が出なくなる。外地にいて祖国日本の有り難さが、しみじみと感じるのでありました。

十二月、モンジョンよりハッーの炭鉱町に移動する。昭和二十一年元旦をハッーにて迎えました。新年の皇居遥拜式が部隊本部前の広場で、第二大隊長はじめ全隊員が集まり実施されました。故郷の空に向かって新年の挨拶、元気でいることを心中で家族に報告、日本に帰るまで頑張らねばと、無言のうちに誓い、元気で故郷の土を踏み皆に会えることを祈りました。

三月のある日、だれ言うともなく、「日本に帰れる」との朗報が我々の耳に入ってきました。それがようやく現実となる。毎日一度つつの復員船、アメリカの軍

用船リバティ号がハイフォン港に日本軍の復員者を迎えに来ることとなりました。

私たちにもハイフォン港の周辺に集結せよとのことでありました。一キロほど離れたヌイディオ（元日本軍兵舎）に集合。我々の復員船は四番船とのことでした。四月の初めころ帰れることとなり、ヌイデオの丘の上に行くといハイフォンの港が眼下によく見えました。毎日、リバティ（復員船）の入港を首を長くして待っていました私はハイフォンの町とは縁があつて、前に申した入院、移動、復員と三度もこの町にお世話になったのです。今度は最後の別れとなるのであります。

四月初めに待ちに待った迎えのリバティが来しました。乗船開始となるが、私が本部要員の関係上、先に亡くなった戦友の御遺骨を幸領していくことになり、船中で御遺骨を守り、亡き戦友と一緒に帰国の途についています。心の中で「仏印の山河よ、ハイフォンの町よ、港よ、越南の人々よ、幸せに、長い間ありがとう、さようなら」と。乗り込んだリバティ号の船員は米軍ではなく、皆日本人であつたので、これで日本に帰れる

との安心感がわきました。船の中には「誰か故郷を思わざる」の歌がスピーカーで流れていました。

全員乗船、所定の場所に落ち着くと、船長の船内放送が、おむね次のごとくありました。

「皆さん長い間、大変ご苦勞様でした。皆さんが夢にまで見た故郷の日本より、今ここに皆さんを迎えにまいりました。もう御安心ください。日本も戦争が終わり平和に向かつて進んでおります。日本国中の皆さんが一日も早く皆さんの帰りを待っています」

船内が一瞬静まり、男のすすり泣き声がする。これが本当の喜びの涙でありました。

私は炭鉱の町ハツを去つて復員のためハイフォンに向かうとき、次のような歌を作りました。

「故郷に 帰る心の 嬉しくも

一抹の淋し 友と別れを」

【付 記】

我々の第二十一師団（討兵団）は仏領印度支那に駐屯した軍紀厳正な部隊でした。

五年前に靖国神社に生存隊員が集まり亡き戦友の慰霊祭を行ったとき、大岩実隊長も車椅子で参加され、英霊の神前で、「六百有余の部下を亡くして、我は今の身を生き永らえ皆々様に申し訳がない」と涙ながらに祭文を読み上げられた。

南十字星のもとで

野戦高射砲第七十二大隊

神奈川県 東海林 俊 文

私の所属していた部隊は、昭和十七年四月、軍令甲第三二二号により編成された高射砲第二十七連隊であり、本隊は札幌月寒であった。しかし、昭和十八年十一月二十八日、動員令を受け、帯広の原隊に帰ってきた。十一カ月ぶりである。行く先は不明であるが軍衣は夏服、帯広の十一月は東京の真冬ぐらいだ。南方戦線のようにだが、しかし嬉しい気分がする。もう覚悟はできているので、いつ死するとも深く醜くからぬことを心

に祈るだけであった。

原隊は懐かしいものだ。札幌から帰って第二大隊第六中隊の兵舎、それも元自分のいた部屋で南方行きの準備をするとは、考えても見なかった。初年兵のところには何もかも忘れて訓練した演習場は、再び見ることはないであろう、感無量である。

アツツ島で玉砕した兵のうち、この第九十一部隊からは六百人も出ている、今度は自分が出陣をするのだ。家には爪と遺髪を送ったが無事着いただろうか、冷たい風が我が身を包む、一刻も早く南に行きたい、はやる心を静め毎日訓練をする。自分らと時を同じうして北千鳥行きの編成があった。彼らは毛の軍衣服を着け暖かそうであった。

原隊に来て幾日目であろうか、演習に出ると将校集合のラツパになる。このときは雪がチラホラと降っていた、間もなく出発の命令が下りたことを知った。直ちに火砲、付属品その他の梱包に取りかかった、交代で装具も纏めた。昼食もそこそこに出陣式が行われる。国旗掲揚、宮城遥拝、連隊長の訓示、送られる者、送